

大統領奪還指令 1

同盟国撤退

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

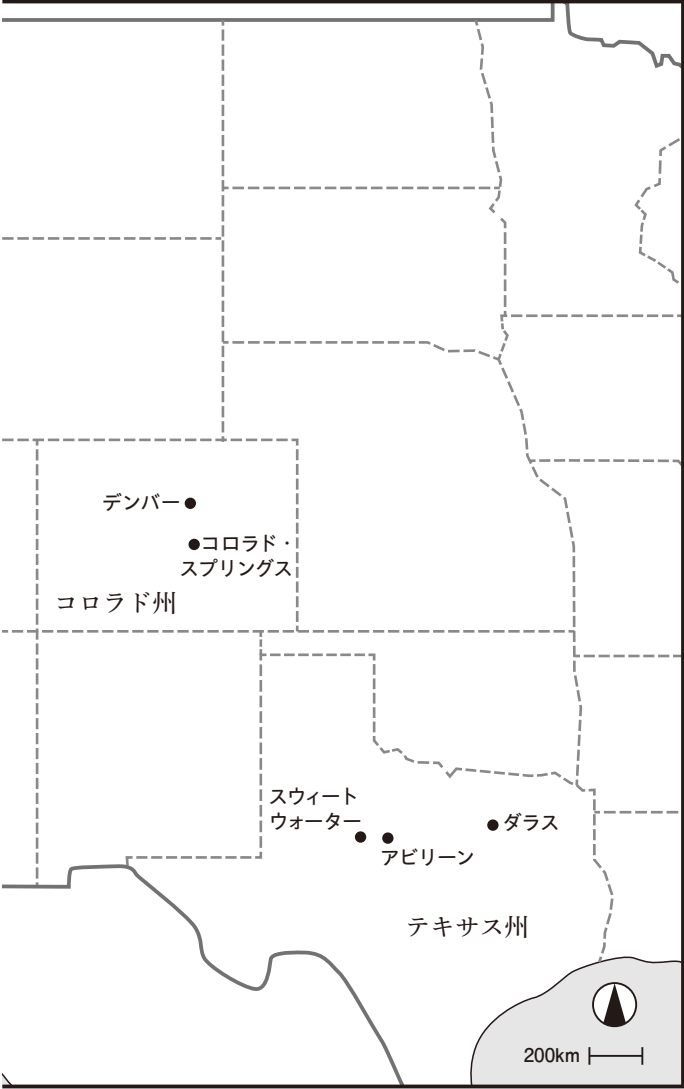
- 頁をめくるには、画面上の▢（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▢キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画
地図
平面
迷惑
星

安田忠幸

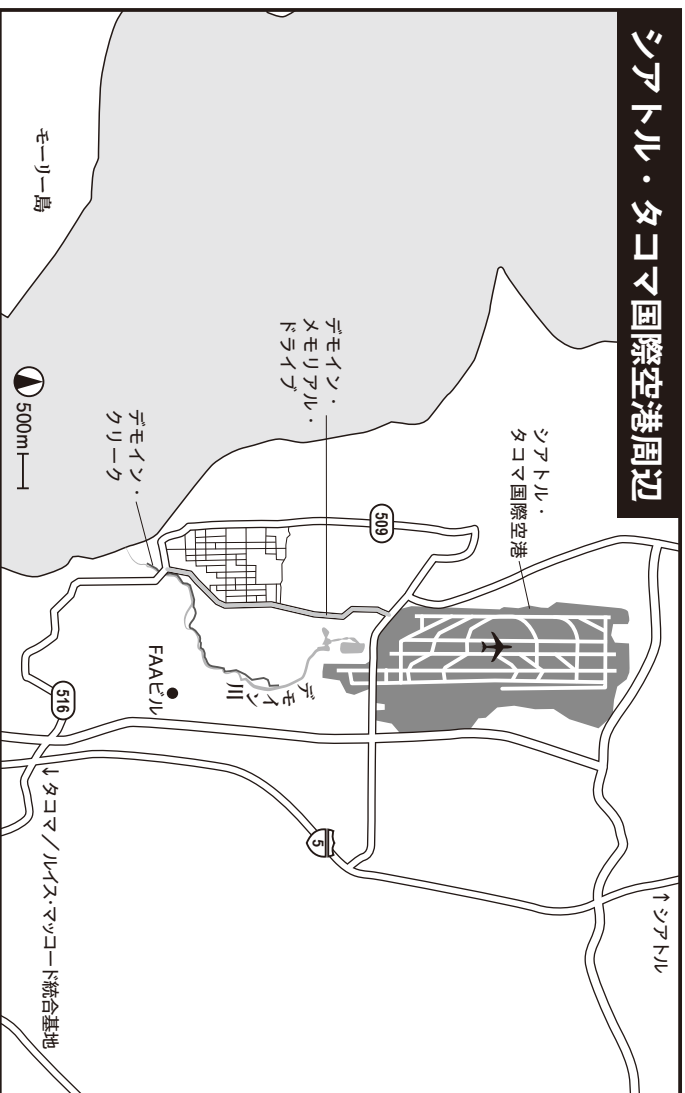
目次

プロローグ	13
第一章 カナダ軍撤退	25
第二章 LAとテキサス	42
第三章 アメリカ陸軍機甲中隊	68
第四章 貧者の戦い	97
第五章 包囲脱出戦	121
第六章 ゴースト・レッグ作戦	147
第七章 脱出と救難	174
第八章 バリアント	202
エピローグ	216





シアトル・タコマ国際空港周辺



登場人物紹介

////【日本】////

●陸上自衛隊

《特殊部隊サイレント・コア》

どもんこうへい
土門康平 陸将補。北米派遣統合司令官。コードネーム：デナリ。

《原田小隊》

はら だ たく み
原田拓海 三佐。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。コードネーム：ハンター。

まち だ はる お
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

たぐちしん た
田口心太 二曹。原田小隊の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひ が ひろ み
比嘉博実 三曹。田口と組むスポッター。コードネーム：ヤンバル。

《姜小隊》

かんあや か
姜彩夏 二佐。元韓国陸軍参謀本部作戦二課所属。コードネーム：ブラッ
クバーン。

ふくとめだん
福留弾 一曹。分隊長。コードネーム：チェスト。

い い かけ る
井伊翔 一曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

みず の とも お
水野智雄 一曹。分隊長。コードネーム：フィッシュ。

み どう そう ま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

かわにし まさ ふ み
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆ ら しん じ
由良慎司 三曹。西部方面普通科連隊から引き抜かれた狙撃兵。コードネ
ーム：ニードル。

《水陸機動団》

し げ ひ かる
司馬光 一佐。アダック島派遣部隊司令官。水機団格闘技教官。

《第3水陸機動連隊》

ごとうまさのり
後藤正典 一佐。連隊長。

ごん だ よう じ
権田洋二 二佐。副隊長。

さめじまたくろう
鮫島拓郎 二佐。第1中隊長。

さかさしんのすけ
榊 真之介 一尉。第1中隊・第2小隊長。

く どうしん ぞう
工藤真造 曹長。小隊ナンバー2。

い わらしん の すけ
居村真之輔 陸将。防衛装備庁・長官官房装備官。

メグミ・モリアーティ 陸軍特技兵。パイロットTACネーム：“^{バリエーション}変異体”。

●ミルバーン隊

アイザック・ミルバーン 元陸軍中佐。警備会社の顧問。かつてデルタ・フォースの一個中隊を率いていた。

●海軍

●ネイビー・シールズ・チーム7

イーライ・ハント 海軍中尉。

マシュー・ライス 上等兵曹（軍曹）。狙撃手。

●空軍

テリー・バスケス 空軍中佐。^{ドゥームズデイ・プレーン}終末の日の指揮機“イカロス”指揮官。

スペンサー・キム 中佐。NSAきってのスーパー・ハッカー。

●ワシントン州陸軍州兵

カルロス・コスポーザ 陸軍予備役少佐。

●FBI

ニック・ジャレット 捜査官。行動分析課のベテラン・プロファイラー。

ルーシー・チャン 捜査官。行動分析課の新米プロファイラー。

ロン・ノックス 捜査官。LA支局・サルベージ班。

●アルコール・タバコ・火器及び爆発物取締局（ATF）

ナンシー・パラトク 捜査官。イヌイット族。

●郡警察（テキサス州ノーラン郡）

ヘンリー・アライ 巡査部長。陸軍に二期在籍したマークスマン。

ペドロ・ガルシア 副署長。

オリバー・ハッカネン 検死医。

●ロス市警

カミーラ・オリバレス 巡査長。

●レジスタンス

ルーカス・ブランク 法学部政治哲学教授。公民権運動の闘士。

リリー・ジャクソン 元陸軍大尉。双発の小型プロペラ機パイパー・セミノール乗り。

●クインシーの若者たち

タッカー・トリーノ ドローン・クラブ“チェイサー”の部長。

ベッキー・スワンソン タッカーの幼なじみで、“チェイサー”のメンバー。

●“ナインティ・ナイン” = “セル”

フレッド・マイヤーズ 教授。通称“ミスター・バトラー”。

トーマス・マッケンジー 大佐。通称“^{グランドマスター}剣闘士”トム。

アラン・ソンダイク 少佐。

●その他

にしやまじょういち

西山 穰一 ジョーイ・西山。スウィートウォーターでスシ・レストランを経営。

ソユン・キム 穰一の妻。

ちよまる
千代丸 穰一とソユンの息子。

たしろでつや
田代哲也 西山の会社員時代の後輩。

モーリス・テイラー 消防署署長。

ディラン・ウエスト アメリカ大統領。元・上院軍事委員会の重鎮議員。

ヒロフミ・アヤセ 合衆国陸軍退役中將。ミライ・アヤセの父。

フランツ・ミュラー アスペン市長。

////【カナダ】////

●カナダ国防軍・統合作戦司令部

アイコ・ルグラン 陸軍少佐。日本人の母を持ち、陸自の指揮幕僚過程修了。

////【イギリス】////

●王立海兵隊

・第42コマンドー

フィリップ・ハークネス 海兵隊中佐。大隊長。

ジェイソン・リックマン 少佐。K中隊長。

ダン・エヴァンス 一等准尉（兵曹長）。K中隊先任曹長。

大統領奪還指令1

同盟国撤退

プロローグ

一六二〇年九月一六日、イギリス南西部のデヴンシャー、今はデヴォン州と呼ばれるコーンウォール半島のプリマスから出航したメイフラワー号は、偶然にも、ニュー・プリマスと名付けられた土地に辿り着き、清教徒らはここにニューイングランド最初の植民地を開拓した。

現代のデヴォン州は、二つの国立公園と世界遺産も有する風光明媚な土地柄で、保養地、観光地として賑わっている。

そしてプリマス海軍基地の所在地であり、王立海兵隊のフォー・ツー・コマンドこと第42コマンドー（大隊相当）が駐屯している。

そのK中隊^キは、本来は一二〇名の兵士を擁するはずだったが、兵員不足で今は一〇〇名に欠ける兵士しかいなかった。

彼らは、それが起こった時、たまたま米本土で訓練中だった。ノースカロライナ州、フォート・リバティ、五万名もの軍人が働く世界最大の軍事基地のフォート・ブラッグ基地で、米陸軍と合同訓練中だった。

ほんの数日、いや数時間でアメリカ全土の治安が崩壊した直後、彼らは、米空軍の輸送機に乗り込み、首都ワシントンDCに派遣された。

当初は、首都警察や、展開する米軍のサポート

をする程度のつもりだった。だが、行政府が集まるワシントンDCの街は、やがて催涙ガスが満ち、誰も身動きが取れなくなった。それでも群衆は徐々に膨れ上がり、ホワイトハウスを包囲し始めた。

政府高官や議会関係者がアンドリュース空軍基地から次々と首都を脱出する間に、議会議事堂は炎上し、大統領はホワイトハウスの地下軍事司令部に立て籠もった。立て籠もった……、と聞かされていた。

フォー・ツー・コマンドは、その大隊兵力で、ホワイトハウスを守っていた。そこに米海兵隊の姿はなく、ホワイトハウスを守っているのは、事実上英海兵隊だった。

彼らはそこに、すでに十日以上留まっていた。最初は、そんなに悪くないと思った。催涙ガスの残留物は漂っていたが、ホワイトハウスの自家発

電装置によって、館内は灯りがあつたし、トイレはもちろん豪華で綺麗だ。ホワイトハウスの職員から、歴史ある部屋や、そこに飾られた由緒ある調度品の解説を聞きながら、館内に蓄えられた非常食にありつくこともできた。

だが状況は徐々に悪化した。ひとまず暴徒の襲撃を撃退し、しばらくは沈静化した。まるでゾンビの群れのようなだったが、こちらの火力には敵わないとわかってから、彼らのフロントラインもだいたい後退した。三日目には、長引きそうだということになり、館内の電気が次々と落とされた。水は貯水タンクにあったが、水道もあちこち止められた。トイレの水洗も使用に制限が掛かった。

五日目には、本国イギリスからの補給ルートが確立され、食料と武器弾薬だけは、空からヘリで運ばれるようになった。

それらを搭載したCH-47F大型ヘリは、K中

隊を率いるジェイソン・リックマン海兵隊少佐が守るサウス・ローン庭へ離着陸する。普段、大統領がマリーン・ワンのコールサインを持つ海兵隊へリで離着陸するお馴染みの場所だ。

国賓の歓迎式典にも使われるサウス・ローンは、年間三六五日、緑の芝生が眩しい。だが今、そこには、あちこち焼け焦げた跡があった。

ホワイトハウスの白い建物にも、無残な弾痕や簡易爆弾を積んだドローンが突っ込んだ痕があった。

新兵が、これじゃ、ホワイトハウスではなく、まだら模様のダルメシアン・ハウスだと冗談を言ったほど、戦いの痕が醜く残っていた。

センターポールには、星条旗が半旗として掲げられていた。それは、この十日間、混乱の犠牲となつた国民を悼んでの半旗だった。二日前の夜、ついに暴徒のドローンがクリティカルヒットして

旗に火が点^ついた。難燃素材のお陰で旗が燃え落ちるようなことはなかったが、星条旗は、真つ黒焦げとなり、無残な姿を晒している。それを掲げていたロープ部分が溶けてポールに絡みついたせいで、回収もできなかった。

ヘリからコマンドを降ろして空中から回収するというアイディアを米側が提案したが、この状況下で優先すべきことではない、と英側は却下した。自分のケツくらい自分で拭けという意思表示だった。

部隊は、すでに犠牲も払っていた。到着した初日に、まず二名が戦死した。翌日には、米側の不快感表明を無視して、芝生の上に土嚢を積んで防御陣地を造った。

アメリカは銃社会だとはいえ、暴徒の装備は、度が過ぎていた。軍用ライフルはもとより、ショットガンに重機関銃まで当たり前に出てくる。

時々、明らかに狙撃手が出てくるので、こちらも狙撃兵を周辺ビルの上昇に上らせていた。

しかし、昨日からの敵は少し違っていた。戦術的な編成によるドローン攻撃を仕掛けてくる。複数の種類のドローンが編隊を組んで突っ込んでくる。その操縦は、素人ではなく、明らかに訓練を受けたプロのものであった。

翼に赤い星のマークが付いたデルタ翼機に殺られて、つい一時間前、三名の兵士が戦死した。もう一人は瀕死の重傷だ。

その重傷兵と、遺体を回収するためのCH・47ヘリが中庭に着陸して飛び立っていく。

K中隊を指揮するリックマン少佐は、キヤツスルロック砦と名付けられた左手側の陣地から、その様子を見守っていた。

ドローンの接近に備えて、上空を味方のドローンともう一機のCHが飛んでいる。

三名が戦死したのは、つい右隣に築かれたデリー砦だった。呆れるほど見事なストライクだった。

対ドローン防御に当たる兵士らが、直前に突っ込んできたクアッド型ドローンの撃墜に気を取られている隙に、遙か上空から急角度で陣地に突っ込んできて、恐らく迫撃弾程度の爆薬が爆発した。重傷とはいえ、生存者がいたことが不思議なくらいの爆発で、積み上げていた陣地の土嚢が一気に吹き飛ばされたほどだった。

ヘリが去って静かになると、命令の怒号が飛び交う。背後で指笛が鳴らされ、第42コマンドーを率いる大隊長のフィリップ・ハークネス海兵隊中佐が、サウス・ボルチコの柱の陰から、手招きしていた。

リックマン少佐は、腰を屈めてそこまで走った。狙撃で殺られた兵士はまだいなかったが、撃たれ

ることは珍しくなかった。何しろ、ここは見晴らしが良すぎるのだ。

「助かりそうか？」

「何とも。意識はあるし、軍医は最善を尽くすと言ってくれましたが……」

リックマン少佐は、柱の陰に隠れながら言った。多くの各国指導者が出入りしただろうドアにも窓ガラスはない。ある程度は掃除したが、地面には、まだガラスの破片が散らばっていた。ここは防弾ガラスではなかったようだ。

「NATO各国で協議が続いているらしい。まずドイツが抜けるそうだ」

「そもそも、展開しているドイツ軍の兵員数は知れていますよね。われわれのように危険な場所にいるわけでもない。兵站支援は続けてくれるのですか？」

「どこかで受け取ってくれる国があるなら、カナ

ダなり安全な場所まで運ぶことは考えようと言うことだ。詳しくは聞いてないが」

「では、支援物資を積んだルフトハンザ機が、ニューヨーク郊外の空港に着陸してくることはもうなくなるのですか？」

「その空港の安全を、ここに残った同盟国軍が、保障できるかどうかだろうな。ドイツとしても、真っ先に支援の輪から抜けたという汚名は後々困るだろう」

突然、ホイッスルが鳴り響いた。短信が三回、ドローン警報だ。外を見ると、防御陣地の外に出た兵士らが、空を見上げてアサルト・ライフルを構えていた。

「彼ら、なんで照準器を外したんだ？」

「いえ、許可はしていません。ただ、あれも完璧ではないので」

「冗談はよせ！ 完璧ではないにせよ、兵隊が勘

で無駄弾を撃ちまくるよりは遥かにましだから導入されたんだぞ」

「西海岸はどうなのですか？」

その話題は突っ込まれたくないので、少佐は話題を変えた。

「自衛隊は、米陸軍の正規軍部隊と派手にやり合ったという噂だぞ。M・1戦車を次々とドローンで撃破したらしい」

「自衛隊がですか？ 展開しているのは、確か日本版海兵隊ですよ。彼ら、今から半世紀待っても、部隊にサプレッサーは来ないだろうと嘆くほどに貧しい軍隊なのに、そんな高性能高威力なドローンは持っていないでしょう。それより、こっちはどうなのですか？ オージーのスリンガーとか、70ミリ・ロケットをレーザー誘導するイーグルスとかありますよね？ 対ドローンのもっと高性能な防御兵器が必要です。だいたい、すでに一

〇名を超える兵士が戦死や負傷で離脱している。ただでさえ数が足りていないのに、戦闘継続はそろそろ不可能です。この作戦は、せいぜい一週間で米軍が治安維持機能を回復する前提で始まったことなのに」

ハークネス中佐は、軽くため息を漏らした。

「……最近はず、ため息をついた程度のこと、パワハラだ何だと苦情部門に訴えられるが。ここだけの話だ。大統領は、もうここにはいない。地下道から脱出したらしい。ホワイトハウスはもぬけの殻だ」

「この地下に踏み留まっているはずの民主党大統領が辞任したことは既知の情報ですが、では共和党の新大統領はどこで指揮を執っているのですか？ 交替して地下に立て籠もっていると思っていました」

「たぶん、ペンタゴンかどこだろう。いずれに

せよ、ここはもう、アメリカ政治の象徴でしかない。あるいはただの観光地。正直なところ、われわれがこれ以上の犠牲を払って守る価値があるとは思えない。海兵隊司令部には、そう報告はしているよ。ただ、ここから撤退するとなると、それはそれで、兄弟国イギリスが、いよいよアメリカを見捨てるといふシグナルになる。そうなれば、西海岸で戦っているカナダ国防軍や日本、韓国も浮き足立つだろう。ここは、そういう政治的な象徴の場になっている」

「せめて、部隊を交替させるべきではありませんか？」

「それも進言してある。こんなに長い期間、ここに留まるとは思わなかったしな。いくら何でも、まだ本国で準備中ということはないだろう。たぶん、マンハッタン島の治安回復作戦に備えている部隊がいると思うが、この状況で、しばらくお預

けになる。その部隊をこっちに回す余力はあるはずだ」

「そちらの作戦は中止になるのですか？ マンハッタン島には、多くのイギリス人同胞もまだ閉じ込められていて脱出できないのに……」

「君の、初恋の相手だっけ？」

「いいえ——」

と少佐は苦笑いした。

「暮らしていたダウンタウンで、同じ学校を出たというだけです。自分はこうして軍隊で名誉ある仕事をしています。彼女は、証券会社に勤めて今はビリオネア。今もパブで飲む田舎の悪友からのメールでは、インスタグラムに彼女が上げた最後の写真は、セントラルパークをバックに、ぴちぴちのタイツを着て高層ビルでヨガのポーズを決める写真だったそうですが。そいつは、ザマアみろ！ 今頃マンハッタンで泥水をすすっているだ

ろう、と喜んでましたよ」

「そういうお金持ちは、真つ先に脱出しただろう」

「それが、外務省が回してきた在米同胞者の行方不明リストに、彼女とその家族の名前が載っているんです。もし無事に脱出していたら、SNSでその恐怖体験を宣伝しまくるだろうから、リストに名前が載るはずはない。まだ島の中だろうと思います」

「彼女から見たら、われわれはただの負け犬なわけだが……」

「任務ですから。救う相手が金持ちだろうと年寄りだろうと関係ない。そう自分に言い聞かせていますよ」

中隊先任曹長のダン・エヴァンス一等准尉（兵曹長）がデリー砦を出て走ってきた。

「チーフ、対ドローン用のショットガンを担いだ

兵士がSMASHを外したようだ……」

とハークネス中佐が早速窺^{たな}めた。

「はあ……。それが、いざという時に、引き金を引けないことで、ストレスが溜まるようでした」

対ドローン用にイスラエルのメーカーが開発したSMASHと呼ばれるAI照準器は、日本を除く先進国の軍隊で採用が進んでいた。照準器に組み込まれたAIが、ドローンの飛行コースを計算し、銃口の向きが外れていると判定したら、銃の引き金は引けないようになっていた。

「それは変だろう。当たらないとAIが判定するから、引き金を引けないのだ。あれは兵士に無駄弾を撃たせるためのシステムではないぞ。何のために訓練したのかわからないではないか……」

「はい。あとで言うて聞かせます。デリー砦の修復は間もなく完了します。それで、突っ込んできたドローンですが、狙撃兵チームの警戒用カメラ

が一瞬捕捉しておりました」

兵曹長は、ポーチに突っ込んだタブレットを出して、その映像を二人に再生してみせた。

「あまり鮮明ではないが、やはり、イラン製のシヤヘドではないのか？」

「似てはいますが。AIのデータベースに判断させたところ、ロシア製の徘徊型ドローン、KUB・BLA^{キユブ}だそうです」

「ウクライナでも使われたのか？」

「恐らく半導体入手の問題から、ウクライナ戦争には間に合わなかったようですね」

「クアッド型ドローンは、いつもの中国製だろう？ 中露の合同軍部隊でも展開しているのか？ 攻撃パターンは明らかに軍事作戦レベルだ。ここDCを支配している暴徒らは統制が取れていない。統制された部隊なら、内部にロシア人集団を匿^{かくま}うことくらいするだろうが、暴徒なら、ロシ

ア人や中国人だって構わず撃つだろう」

「全米が停電する原因になった山火事は、ロシアの民間軍事会社の工作だとわかっている。その連中が、次の作戦に出てきたのかもしれない。シアトルでは、大っぴらに自衛隊と戦っていたようです。チーフの見解は？」

とリックマン少佐が尋ねた。

「中露は、ドローンを提供したかもしれませんが、パイロットまで派遣したかどうか……。米軍だつて、最近はその手のドローン・パイロットの養成を熱心にやっています。自分はその可能性の方が高いと見ます。ドローンに、わざわざ赤い星のマークが描かれているのは、それを偽装するためでしょう。それと中佐、一応、ご報告しておきますが、スターリンクの使用制限に関して、兵たちから不満の声が上がっています」

「わかっている。部隊の兵の誰一人として、その

使用のルールを破っていないことは承知している。この綺麗なホワイトハウスの写真を撮ってSNSに上げるようなバカが未だにいないことに感心しているが、まずは戦死者のご遺族に訃報を知らせてからだ。後で情報漏れに気付いて、上からやいのやいの言われるよりは、今、使わせずに安心した方がましだ。われわれは鍛えられた兵士だ。ただかだか二、三日ネットが使えない程度で……。もしニュースが知りたいのであれば、誰か士官にダウンロードさせて、ローカル保存して閲覧させてくれ」

「了解であります。どんなニュースでも、ないよりはましですから」

兵曹長が去っていくと、「まるでアフリカだな……」と中佐は嘆いた。

「ここはもう、政府が逃げ出して治安崩壊したアフリカの途上国と同じだ。挙げ句に、当事者のア

メリカ軍が敵に回るとあっては、われわれがここに続ける理由はない。英国政府が、NATOの流れに従ってくれることを祈るよ。いくら兄弟国でも、米軍の正規軍部隊とは戦えないからな」

「同感です。これ以上の犠牲が出る前に撤退しなければ、われわれの指揮ミスを問われます。あの時点で撤退の判断ができたはずだと」

遠くからドラムの音が聞こえてくる。まるで何かの音楽フェスを行っているような感じだが、そうではなく、われわれを脅しているのだ。ここが包囲されていることをアピールするためのものだった。

幸い、視界内に死体はない。全て片付けさせた。だが、一步、政府施設の角を曲がると、そこいら中、死体だらけだった。明らかに警官や兵士だとわかる遺体は極力回収に努めていたが、それ以外の、暴徒か、たまたま逃げ遅れただけの政府職員

の遺体は放置されたままだ。今はそれを時々カラスが集って啄^{つば}んでいる。

奴らは、露出した柔らかいところから喰らう。つまり、目玉から喰う。運良く治安が回復したとして、あの遺体を誰が回収するのだろうか、トリックマン少佐は思った。せめて、そういうことは、自国軍部隊でやってほしいものだが……。

アメリカは、分裂し、破滅しようとしていた。大統領選の結果を巡る各州大陪審の結果に端を発した全土での暴動は、中露が暗躍した大停電が火に油を注ぎ、あつという間に全米規模の暴動と破壊へと進行した。

民主党大統領は、事態の責任を取って辞職、副大統領が就任を固辞したため、大統領継承順位に則り、議会から共和党指導者が新大統領として指名されていた。

その分断は、軍内部にも及び、国防総省は、よほどの例外を除いて全部隊の営内待機を命じた。代わって、東西から派遣された同盟国軍部隊が、治安回復と医療食料などの支援に当たっていたが、何しろアメリカはあまりにも広く、国民の武装度も群を抜いていた。

まるで軍隊レベルの装備に、各国軍部隊は手を焼いていた。その暴動、革命運動とやらの先頭に立つ指導者らを追い詰めてはいたが、ついに北西部の重要拠点シアトルで、米陸軍部隊が反政府側に立つて決起した。

シアトルを守っていた自衛隊は、やむなくこれと交戦、撃退していたが、状況は悪化するばかりだった。運悪く北米は、記録破りの猛暑に見舞われ、停電下でのサバイバル生活を強いられる人々は、飢えと渇き、そして熱波との戦いにも直面していた。

ニューヨーク州マンハッタンのように、治安当局が完全に撤退し、まるでハリウッド映画のようなデイストピア社会へと変わった街もあった。

そこに文明はなく、弱肉強食の暴力と略奪に支配されていた。アメリカ軍の反乱軍支持という新たな状況に、同盟軍部隊は動揺し、支援の手を引こうとする国々も出てきていた。

第一章 カナダ軍撤退

アメリカ北西部、ワシントン州シアトルの空の玄関口、シアトル・タコマ国際空港は大混乱の最中であつた。

ここは、陸上自衛隊を筆頭に、シアトルの治安回復任務に当たる日本、カナダ合同軍、及び地元当局の指揮所が置かれ、また太平洋を渡ってくる民航機のデポ拠点にもなつていた。自衛隊は、ここから北のダウンタウンへと攻勢に出て、*ニイ*ンティ・*ナイン*、もしくは*シセル*を名乗る暴徒たちを追い詰めていた。最低でも二万を超える彼らは、一時シアトルから東へ、シカゴを目指したが、自衛隊によつて阻止され、ここまで押し戻

されたのだつた。

一時はこの空港も彼らによつて占領される寸前まで行つたが、カナダ国防軍の善戦と、航空自衛隊輸送機から放たれた巡航ミサイルによつて撃退された。

空港から北へ一五キロ、各国領事館や行政府が集まるダウンタウンまで、合同軍はじりじりと北上を続け、シアトルの解放作戦はあと一步まで到達していたところに、シアトルの南にある、太平洋岸最大の軍事基地、ルイス・マッコード統合基地で、正規軍部隊の反乱が起こつた。

最初は、ほんの一部の、義憤に駆られた将校に

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。